

ひとを、ならう

大沢綾子

私が「大阪文学学校」のホームページを覗いたのは、回転寿司屋の二階、ひと目で座る場所がない、とわかるほど混雑した待合スペースだった。店内に、正月の定番曲、お琴の音色が際立つ『春の海』が流れるなか、それをかき消すように親に抱かれた赤ん坊が泣き、子供が走りまわり、少し大きなお子さんはゲーム機をのぞき、大人たちは表示される三ヶタの番号を気にしながら、話していた。

隣には夫がいて、しきりと申し込みを勧めてくる。

——「どうや? と、夫。ううん……、と、私。

返事がマイナス方向に振れているのは、手にしている携帯電話（スマートフォンではない。そんなものは、まだ、なかった）の液晶画面が小さくて、しかも通信速度が遅い（ためではなく——「学校」と名のつくものにはいい思い出がないせい）だった。

だいたい、成人式を二回もやれる四十過ぎの女が、いまさらなんで「学校」なのだ? それも、趣味らしくヒッソリ一人で楽しんできた小説のために? その小説も、小説なんて言ってしまうといいんでしょうか、と肩をすぼめてうつむい

て、一般受けはしないと思うけどなあ、と呟くジャンル。純文学でも、歴史ものでも、推理小説でもなかった。

そんな私に、どうしろと? 年間の学費もさることながら、前出の理由から、とてもとても私のような者は受け入れられないだろう、と思っていた。ところが、ポチポチ、ポチポチ携帯電話の小さなキーを指で送っていく先に、「灰谷健次郎」という名前が、あるではないか。

——灰谷健次郎。

錚々たる作家名が連なるなかで、その名前だけが、私には親しく、かつ、光り輝いて見えた。というより、灰谷健次郎の本しか知らなかったのである。

私がいままで読んできたのは、モーリス・ルブランや横溝正史、平井和正、栗本薫で、社会人になってようやく、司馬遼太郎と阿川弘之、吉村昭を知ったのだ。ただ、灰谷健次郎だけ。それも、せいぜいが『太陽の子』が、『兎の眼』が、何度も読めるほど、好き! 程度である。大丈夫か? じぶん。

隣に座る夫が、またもや「どうや?」とブッシュしてくる。

夫は、深夜に観たテレビ番組の「文校」の合評風景に、いたく感銘を受けていて、大沢綾子にいま必要なのはコレだ！と思ひ決めてくれていたのだ。

悩む大沢綾子は、二〇〇九年の春、昼間部本科生となった。

「学校」という二文字がついていたばかりに、私はせっかく入学したのに、本科のクラスを二週もつづけてシカトした。そのあいだに、作品提出の順番が決められていて、とうとう、チューター直々にお電話をいただく羽目になった。そのときの佐久間さんの第一声を、十五年経ってもありありと思ひ出せる。

——あの、大阪文学学校の佐久間です。

ひとの声を、描写するのは難しい。ただ、私がそれまで聞いたことのない声質だった。電話を通して聴き取りやすく、はきはきとして、かつ、甲高くなく、低くもない、あつたかい声だった。その声で、「来週ね、作品提出なんだけど、出せる？」と尋ねられて、思わず力いっぱい——え、はい！出せます、出せます！と答えてしまったものである。どうも、気持ちがあうわづつていたらしい。事務局に「持病が出て休みます」なんて言ったことなど忘れている。いやあ、この、元気なお返事はなんでしょうね。ズル休みが、バレたじゃないか。

いざ通いだしてみると、大阪文学学校というのは想像いじように面白い場所だった。過去の学校は、右を向いても、左を向いても同年齢、同世代の限定的な世界だった。自然、ク

ラスメイトと「違う」ことの一つひとつが際立ってしまう。でも、ここでは性別も、年齢も、学歴も職業、生い立ちも、他者との違いを探する必要はなかった。昼間部は平均年齢が高く、誰もが自らの人生を生き抜いてこられた方々ばかり。むしろ「違い」こそが作品を生かす個性になっていた。

元銀行マンの書いた職業小説は決算資料の数字がリアルだった。戦時中の疎開体験記は、疎開先によってずいぶん苦労が違っていた。家族のことを書いた作品には、作者の愛情や後悔、痛みが深々と染み渡っていた。お父様のことを納得いくまで書いてこられたWさんの作品は、いまでも心に残っている。平静で理性的な文章は、美しかった。——と、ここでKさんを思い出した。Kさんは、当時でもすでに高齢だったが、いつも若々しくてブランド物の衣装をさりげなく着こなすお洒落さんで、お若いころの話はキラキラしていた。とくに、着物の帯に札束を押し込んでヨーロッパに買い物旅行した、という話の衝撃は、いつ思い出しても新しい。あんなに華奢でちいさい人のどこに、そんな豪胆さがあつたのだろうか？ Kさんは、作品ではなく、おしゃべりで自分を語るたのしいひとだった。

小説を書く、ということが自身を語る、とわかったのも合評を通してだった。組上にある作品は一つさりなのに、アンテナが立つひとと、そうでない人がいる。作品の奥に隠れている作者を見つけるひとと、そうでない人がいる。とくに本科、専科のあいだは書くほうも読むほうも未熟だから、たまには批評する言葉が刃になったりもする。それでも大勢があ

つまつての合評だと、誰かが必ずすくい上げてくれるものだ。一番すくい上げてくれたのは、もちろんチューターだったけど、人生経験の長いひとたちが多い昼間のクラスは、その点、私に人づきあいというか、人との間合いを教えてくれる得難い場所でもあった。

そうだ。

いい小説の書き方を習いにいったつもりだったけど、私の場合は、「ひと」を習いにいったのだ。

私とちがう人生、家庭環境、経験——そんなものを、作品合評を通して知っていく。作品をひとつ書くたびに、私はわたしを脱いでいく。

え？ だとしたら——いつか、丸裸になるんだろうか？

いや。いやいやいや……。

それは、勘弁していただきたい。